

# 会いにいけない「有名人」

## 死刑囚130の個性と向き合う

### 死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会（そばの会）

昨年3月に釈放されながら、まだ再審が開始しない袴田巖さんも含めて、日本には130人（8月1日現在）の死刑確定囚がいます。処刑場をもつ七つの拘置所の中でも一番大きい東京拘置所に、その約半数が生活しています。

「有名人」がこんなに集まって住んでいるところはない、という意味では、東京一番の観光名所かもしれない。

☆☆☆

しかし、一般の人が、彼らに会うことはできません。死刑確定者は外部との交流を著しく制限されているので、面会や文通ができるのは、弁護士や家族、特別に認められたわずかな友人たちに限られます。

こんなに厳しくなったのは、1980年代に死刑囚の再審無罪事件が相次いでからではないかと言われていました。

冤罪〔えんざい〕を訴える死刑囚が、多くの支援者との交流の中で、励まされ、無実の証拠が次々と発掘されだしてから、死刑囚と社会との接点はどんどん閉ざされるようになりました。

☆☆☆

「凶悪な犯罪を犯した奴は人間じゃない」「彼らに人権はない」と言う人も少なくありません。「人間じゃない」と切り捨てられるのは、その日常の姿が隠されているからかもしれません。

凶悪な犯罪事件で被疑者を逮捕すると、捜査機関は、いちばん人相が悪く写っている写真をマスコミに提供しているといわれます。マスコミのほうもそんな写真を選んでいるかもしれませんが、そうやって裁判を待たずに悪印象が広まることは、裁判員制度のもとではいっそう有罪率と厳罰化を高めることになります。

☆☆☆

国会議員の協力により、この6～7月、死刑確定囚130人へのアンケートが行われました。「今、いちばん訴えたいこと」などのほか、「今、聴きたい曲は何ですか?」「今、会いたい人は誰ですか?」といった質問にも答えてもらいました。

今年の世界死刑廃止デー記念企画「響かせあおう死刑廃止の声」（10月3日、渋谷区大和田伝承ホール）で朗読劇の形で紹介される予定です。どうぞ、耳を傾けてください。